

令和 2 年 7 月 7 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K01735

研究課題名（和文）プロサッカー選手を目指す中学生のキャリア形成プロセスに関する研究

研究課題名（英文）Research on career formation process for junior high school students aiming for professional football players

研究代表者

飯田 義明（IIDA, YOSHIAKI）

専修大学・経済学部・教授

研究者番号：30297072

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：これまでスポーツ社会学では、プロスポーツ選手を目指す親たちを対象とした研究は殆どされてきていない。本研究では、重要な他者である親（父親）がプロスポーツ選手を目指す子どものキャリア形成プロセスにどのように関与しているかに着目し、それを明らかにすることであった。
その結果、父親は子どもの競技成績（クラブ内における位置付け）を受け止めつつ、子供の主体性を尊重しながらキャリア形成に影響を与えている可能性が示唆された。ただし、そこには父親の学歴、スポーツキャリアが少なからず影響を与えていることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

サッカーは学校部活動と学外クラブ（以下、Jクラブ）が併存し、多様なキャリアプロセスからプロ選手をJリーグへ供給している。それゆえ、スポーツと学業における関係性とそれに伴う進路選択プロセスが子どもや親にとって複雑になってきている。

本研究はキャリア形成論及び教育社会学の理論を背景とし、そこにプロスポーツ選手を目指す子どもの事例を加えることにより、多様化するキャリアの在り方と学歴との関係性を明らかにし新たな学術的意義を加えることが可能であると思われる。また、社会的意義としてプロ化へ移行する競技団体に向けた学問的見地からの提言も可能となるだろう。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to determine how parents, who are significant others, are involved in the career choice process of their children who are aspiring professional athletes.

The results suggest that fathers accept their children's competitive performance and respect their children's initiative, which may influence their children's or career development processes. It was suggested that this may be influenced by the father's educational background and sports career.

研究分野：スポーツコーチ学、スポーツ社会学

キーワード：プロサッカー選手 中学生 キャリア形成 重要な他者 父親

1. 研究開始当初の背景

近年、様々なスポーツがプロ化されてきている影響を受け、プロスポーツ選手を目指す子どもたちの種目開始年齢が低年齢化し、かつ早期高度化してきている。これらの動向も踏まえ、2014年以降 JOC は海外で提案されたデュアルキャリアの考え方を取り入れ、育成期のスポーツと学業の両立とその環境を構築していくことの重要性を指摘している。

このような背景の中、プロサッカー選手を目指す子どもたちは、どのように親と進路選択を行っているのか、そのプロセスを問うていくことはデュアルキャリアの視点からも重要であると思われる（飯田 2012）。また、そこに関わる家族や父親はどのように子どもに関与、影響しているのか、ここに本研究の問題意識がある。

2. 研究の目的

研究の問題意識から本稿の目的は、子どもの進路選択の決定過程を本人による主体性からのみの分析ではなく、「重要な他者」にあたる父親への聞き取り調査より浮かび上がらせることであった。

3. 研究の方法

現段階として J1 クラブの Jr チームに所属する子供の父親から 6 名から聞き取り調査を行った。聞き取りは、半構造化面接の手法を用いた。会話に関しては、対象者の了承を得て録音した。各事例に、1) その「語り」のデータをすべてテキスト化し、2) テキストをセグメント化しながら、3) 各セグメントにコードを割り振った。これらの作業は、MAXQDA2018 ソフトを用いて行った。そして各事例間で共通点と相違点を抽出した。また、分析の際に父親の学歴及びスポーツキャリア、現在の仕事等の背景を考慮しつつ分析を行った。

分析対象者プロフィール

	年齢	活動チーム	兄弟	進路状況	父親仕事	父親最終学歴	父親スポーツ歴
A	40代後半	Jrユース(J1)	次男(二人)	進学校	大企業	私立大卒	愛好者
B	40代後半	Jrユース(J1)	次男(二人)	Jユース	大企業	私立大卒	大学体育会
C	50代前半	Jrユース(J1)	長男(三人)	サッカー進学	教員	私立大大学院終了	大学体育会
D	40代後半	Jrユース(J1)	次男(三人)	Jユース	大企業	私立大卒	なし
E	40代後半	Jrユース(J1)	長男(二人)	サッカー進学	サッカー指導者	国立大大学院終了	大学体育会
F	40代後半	Jrユース(J1)	長男(二人)	Jユース	自営業	高卒	なし

4. 研究成果

【事例分析】

聞き取り可能であった 6 名の父親のうち、3 名の選手はユースチームに昇格することできず他を選択することとなった。その中から本稿では、A、B、C 氏の 3 例を取り上げた。

(1) A氏プロフィール

A氏は、祖父、父親も同じ有名私立大学を卒業しており、本人も将来的な進路先として同様の道を意識している。正月は家族ぐるみでスポーツ観戦を行うなど、スポーツに対しては好意的に考えている。特にA氏自身が高いレベルで競技をおこなってはいない。卒業後は、大企業に就職している。

① 当初の進学に対する意識

A氏は、子どものサッカーの競技成績との関連から進路は考えるようにしていた。すなわち、最初から進路先を考えていたのではなく、サッカーで成功したらそれはそれで良いと考えていた。その一方で、子どもの進路形成に関しては高い意識を有している。

② 進学先決定の経緯

2年生になってもレギュラーの座を掴むことができなかつたため、このころから本人とも進路ことは話し合い重ねていた。そのため、2年の終わり頃には家族で進学先を話し合い、勉強も意識して高い成績を修めていた。A0推薦によって最終的には、父の出身大学の付属高校に入学し、大学（関東大学リーグ）でのレギュラー出場へと目標を変更した。

③ 支援と父親（家族）の役割

早い段階で、進路選択への方向性を決定していたため、サッカーから受験への移行もスムーズであった。進学を考えていた高校の情報は母親が中心となり進められた。全国大会へ出場したサッカー経験を利用したA0推薦も念頭に置きつつ、塾に通うなど受験勉強も並行して行っていた。父親は、母親からの情報を元に本人と話をするなど、裏方に回って支えていたと言える。ある意味では、両親、本人の方向性が一致していた。

(2) B氏プロフィール

B氏はご本人が中学時代からバスケットを続け、私立大学の体育会バスケットボール部で活動していた。そのためスポーツに対して非常に理解を示している。その後は、スポーツ選手として企業へ就職したのではなく一般社員として大企業に就職し、現在に至る。

① 当初の進学に対する意識

子どもの教育に関しては基本的には自分で考え、進みたい道へ進むべきだとの考えである。ただし、放任主義ではなく、子どもとは常にコミュニケーションを取りながら進路を決定するようにしている。

② 進学先決定の経緯

U-15カテゴリーの日本代表に選出されるなど中学年代でも活躍しており、早くからユースへの昇格は決定していた。その一方で海外遠征などが多くあり、中学校での出席日数に問題が生じ、校長から「このままでは成績が出せない」と言われるほど勉強との両立で困難を有していた。クラブ側からは特に高校の指定がないため、父親と話し合いの結果、現在の私立高校に進学することとなった。

③ 支援と父親（家族）の役割

中学校での保護者会で出席日数のことを指摘され、勉強との両立にかなり苦勞をしている。これまで、サッカーを中心に活動をしてきていたため、進学に関して熱心に勉強をして

きていなかった。そのため、高校受験に関しては大学生であった兄が多くの時間をさき家庭教師のようにマンツーマンで指導をしたようである。父親はクラブとの直接面談などをして
いるが、クラブ側の進路指導等に関しては少し不信感を抱いていた。

(3) C氏プロフィール

C氏は私立大学の体育会出身であり、世界レベルの大会でも優勝するなど優秀なスポーツ選手であった。その後、大学院に進学をし、現在は大学教員をしている。自分自身がスポーツを通して現在のキャリアを形成してきたこともあり、日本のスポーツ界の在り方をよく理解している。

① 当初の進学に対する意識

スポーツは重要であるとの認識を持っているが、同時に勉強もある程度のレベルを獲得できなければならないと考えている。そこには、自分の進んできた道を重ね合わせていると思われる。また、スポーツを利用した高校、大学への推薦制度に関してもよく理解しているため、子どもの進学に対しても選手として優秀であればスポーツ推薦も念頭に置いているようであった。

② 進学先決定の経緯

2年次より、出場回数が増えレギュラーの座を掴み、クラブとして出場した世界大会においても海外から高い評価を受けるなど順調であった。しかし、その後の怪我から調子を崩しユースチームへの昇格は叶わなかった。両親に成績の大切さのことは言われていたため、公立中学校においてある程度（オール4程度）の成績は修めていたが、本人がプロを目指して継続してサッカーを行うことを選択したため、県外のサッカー強豪校への進学を決意する。

③ 支援と父親（家族）の役割

3年次の夏過ぎにユースチームへの昇格ができないことが明らかとなった。怪我のこともあり、情報（高体連の強豪校の状況など）は母親がサッカー仲間の（ママ友）ライングループから得ていた。父親は、時間が可能な限りクラブへの送り迎えなどをしていた。どの高校へ進学するかは両親、本人を含め直ぐには一致しなかったようである。最終的には、本人の希望する高校を選択することになるが、勉強の成績については手を抜かないことを父親から厳しく言わたされていたようである。

【考察】

上記の結果から「子どもへの関わり」「方向性の同一化」「家族（母親と）の教育方針」の3局面のコードが抽出され、それについて若干の考察を加えた。

1. 子供への関わり局面

A、B、Cの3名の父親は過剰に子どもに接するのではなく、母親からの情報を得つつ節目で父親としての方針を遠巻きに伝達していたと考えられる。C氏は他の方より現状の高校・大学へのスポーツ推薦システムを良く理解しており、子どもへの進学に対する局面には気を使っていると言える。そこには、子どもの「夢=思い」を安易に親が方向づけたくはいけないという思いと葛藤しているように考えられた。つまり、子どもとの対話、支援（可能な限

り)、見えない方向づけを行っていると言えるだろう。一方で、A、B氏は本人の競技成績から早い時期からユース昇格、不昇格が明確になり、その方向に対して子どもの次のステージに向けて父親や他の家族も支援をしている。

2. 方向性の同一化局面

A、B氏は、ある意味でその後の進路選択において母親を含め三者が一体となっていると考えられる。しかし、C氏はここで困難な状況が発生している。C氏は、9月過ぎになって昇格できない旨をクラブから伝えられ（昇格できる可能性が充分あると子どもは思い込んでいたようである）、それゆえその後の進路選択における家族間における方向性の同一化にかなりの時間を要することとなる。最終的には、父親が子どもの意思を尊重することになるが、勉強面の約束事を交わしている。

3. 家庭（母親と）の教育方針

子どもの方向性が早くから一致している場合（昇格可）は、家族（両親）もそれに合わせて向かっていっている。そして、将来は子どもがプロへという「夢=思い」に強く方向づけられていくので（C. Steavenson, 1999）、ある意味で家族間での不一致は少ない。その一方で、境界線に置かれた家族にとっては、子どもの次へのキャリア形成（学歴を含め）に向けての大きな分岐点になる（多賀 2012）。A家族は進学校を選択し、C家族は県外の全国大会上位常連校を最終的に選択したが、その家族内での決定過程には多くの葛藤が見受けられた。

【まとめ】

父親は子どもの競技成績を受け止めつつ、子供の主体性を尊重しながら進路選択に影響を与えている可能性が示唆された。これは、「親の資源+選好=選択」つまりペアレントクラシーとも捉えることも可能であろう（天童他 2016）。一方、子どもの選択行動を支える「戦略としての家庭教育」は、必ずしも父親、母親、本人と三者が一致した安定したものではなく、それぞれの考えを擦り合わせるなどの多層的で動的な様相をしているといえる。

【参考文献】

IIDA Yoshiaki, 2009, Career development process for youth soccer players in the J-League Academy - Career formation and career orientation -, Science and Football VI, Routledge. pp. 471-475.

飯田義明ら、2012、:Jクラブに所属するユース選手における進路決定プロセスに関する一考察、専修大学社会体育研究所報, pp. 17-28.

多賀太、2012、「教育する父」の意識と行動 —中学受験生の父親の事例分析から—, 教育科学セミナー, 43, pp. 1-18.

天童睦子、多賀太、2016、「家族と教育」の研究動向と課題 —家庭教育・戦略・ペアレントクラシー—, 家族社会学研究第28巻第2号, pp. 224-233.

Steavenson Christopher, 1999, "Becoming an International Athlete" INSIDE SPORTS, Routledge, pp. 86-95.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Uemukai, Inaba, Iida
2. 発表標題 A study of career formation and identity status in Japanese University female football players
3. 学会等名 23rd European College of Sport Science (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 飯田義明
2. 発表標題 プロサッカー選手を目指す中学生の進路選択に関する基礎的研究(II) - 子どもの選択に父親はどのようにかかわっているのか -
3. 学会等名 16th 日本フットボール学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	上向 貫志 (UEMUKAI KANSHI) (40291661)	武蔵大学・人文学部・教授 (32677)	